opusdei.org

## 属人区長の手紙 (2015年11月)

死についてのキリスト教的考え方は、人がその見知らぬ一歩に襲われがちな恐れに対抗する本物の手段となります。しかし、死は「容赦なく訪れるでしょう」(聖ホセマリア)。

2015/11/10

愛する皆さん、イエスが私の子供た ちをお守りくださいますように!

昨日、聖エウジェニオ教会で、皆さ んの兄弟の幾人かに助祭叙階の秘跡 を授ける幸運に恵まれました。この 息子たちは、キリストの神秘体の生 きた部分である属人区の使徒職活動 に献身し、熱心に教会に仕えること でしょう。教会は、聖ホセマリアが 望んでいたような、聖にして博学、 明るくスポーツマンのような内的戦 いのできる司牧者を、極めて必要と しています。世界中の教区でこの 賜・聖なる司祭、神学生が決して欠 けることのないよう、心を込めて神 に願い続けましょう。11月になる と、まず諸聖徒の交わりという非常 に慰めに満ちた真理が頭に浮かびま す。今日は特に、天国で至聖三位一 体の喜びに入っている信者を思い起 こします。そして明日は、私たちが 深い友情を培うべき人たちで、未だ 煉獄で清めを受けている信者の霊魂 を眼前に思い浮かべながら祈る日で す。

創立者のパドレの信心が思い出され ます。パドレはこの日、祝された霊 魂が罪による有限の罰から完全に解 き放たれ 一教会の執り成しの祈りの おかげでもある一、神の至福直観に 入ることができるよう願いつつ過ご していました。創立者はこのあわれ みと愛を表す思いに急き立てられ、 オプス・デイでは、亡くなった娘た ち息子たち、私たちの両親や兄弟、 協力者、そしてすべての死者の永遠 の安息のため、ミサ聖祭と聖体拝 領、ロザリオの祈りを捧げることに しました。この執り成しの祈りを寛 大に捧げ、この他にも、適切と思わ れることを加えるようにしましょ う。特に、祈りと償いの明るい精神 で、完全にやり遂げた仕事を捧げる こと。

聖パウロが非常に相応しい勧めをしています。cotídie mórior! [1] イエス・キリストと共によみがえるため、私は、日々、罪に死んでいる。

聖ホセマリアは、使徒の勧めを受け 入れ、神にまみえるための準備をで きる限りよくしたいという熱意を 持って、人生の最期について度々黙 想するよう勧めました。死は例外な く全ての人に関わる現実です。多く の人は死に恐れを抱き、できるだけ 忘れるようにします。信仰に生きて いるキリスト信者はそうであっては なりません。「<他の人々>にとっ て死は、立ちすくませ、恐れをいだ かせる現実である。一方、私たちに とって、死つまり永遠の命は、元気 を与え、励ましてくれる現実であ る。死は、彼らにとっては終わりで あり、私たちにとっては始まりであ る」[2]。

しかしながら、この現実は時々、ドラマチックな様相を帯びることがあります。特に思いがけなく出くわしたり、将来に多くの可能性を秘めた若者に訪れたりするときです。教皇様がこのような場合についてコメン

トしておられます。多くの人にとって「死は家庭生活に開いたブラックホールのようです。死を説明することなどできません」[3]。

しかし、忘れてならないことは、聖 書の「神は死をつくらなかった。神 は、生きる人が滅びるのを喜ばな い | [4] という言葉です。人間は死 ぬべき被告物ですが、全知全能の神 は、もし人祖が神の掟を愛し、忠実 に従っていたなら、人を不死にする つもりでした。彼らが、誘惑者に騙 されてしまったので、現在の状態に なったのです。「このようなわけ で、一人の人によって罪が世に入 り、罪によって死が入り(…)、全て の人に及んだのです。すべての人が 罪を犯したからです」[5]。

このテーマについての創立者の考察 は私たちを励まし、慰めてくれます が、その中でも次のような言葉があ ります。「死は容赦なく訪れる。と すれば、この世での生活をすべての 中心に置くことは、なんと空虚なむ 栄であることか。大勢の男女がさ ほど苦しんでいるか考えてみなさ い。ある人は、一生がまだ続くので 退屈して苦しむ。いずれの場合も、 この世での歩みを目的そのものなう ない。 ない。

このような考え方を捨て去って、永遠の論理に錨を下ろさなければならない。根本的な改革が必要なのだ。すなわち、自分自身と儚い自己中心的な動機を空にして、永遠であるキリストにおいて生まれ変わるのである」[6]。

私たちのために十字架に付けられた イエス・キリストを信仰の目で一瞥 するだけで、悲しみよりも慰めの多 いこの真理を垣間見ることができま す。『カトリック教会のカテキズ ム』が教えています。「キリストの

おかげで、キリスト教的死は肯定的 な意味を持つようになります。『わ たしにとって、生きるとはキリスト であり、死ぬことは利益なのです』 (フィリッピ1,21)。「次のことばは 真実です。『わたしたちは、キリス トとともに死んだのなら、キリスト とともに生きるようになる』(2テモ **テ2.11**)。キリスト教的死の本質的な 新しさとは、キリスト者は新しいい のちに生きるためにすでに洗礼に よって秘跡的には『キリストととも に死んで』おり、わたしたちがキリ ストの恵みのうちに死ぬならば、肉 体的な死はその『キリストとともに 死ぬこと』を完遂し、わたしたちを キリストのあがないのわざに完全に 組み入れるということです」[7]。あ る兄弟の母親が臨終に際して、信仰 をもって「何年も何年も毎日ご聖体 を拝領して来たのですから、主が私 を受け入れてくださらないわけはあ りません」と言う言葉は、完全に正

しいとは言えないまでも、真理に根 差しています。

希望と愛につながる信仰による確信 は、この世の最期のことを考えて大 方の人が抱く悲しみや恐れを払拭し ます。さらに、聖なる人たちの最期 が特別鮮明に示しているように、信 仰によって死を心やすらかに受け入 れます。主との出会いに赴くことで すから。「死に対して恐れを抱かな いように。今から広い心で…、神が お望みの時…、お望みの方法…、お 望みの場所で…、あなたにお与えに なる死を受け入れなさい。父なる神 は、もっとも適した時、もっとも適 した場所、もっとも適した方法 で…、死をお送りになることを疑っ てはならない。私たちの友なる死を 喜んで受け入れることができますよ うに [8]。

この考えは、伝統的な教理であり、 キリスト信者の態度を表していま す。これは何か否定的なことを示唆 しているのでも、無思慮な不安を掻 き立てようとすることでもなく、して に全幅の信頼を持っている子とです。 の聖なる恐れに由来することです。 超自然的人間的な現実主義で知恵を 信仰に基づくキリスト信者の知恵を 表し、人に落ち着きと確信を与えます。

創立者は、この最期について、また 一般的に四終についての黙想から実 際的な結果を引き出すよう教えまし た。ある時、若年の子どもたちのグ ループに話していました。「これら のことについて冷静過ぎる考え方を しないようにしましょう。私は、皆 さんの誰も死ぬことを望みません。 主よ、未だ誰をもお呼びにならない ようお願いします。皆、若いので す。そしてこの地上にはあなたの道 具が少ないのです。主は聞き入れて くださるでしょう…、しかし、死が 訪れる可能性はいつでもあるので

す」[9]。そして結論付けました。 「死に関する何と客観的な考えで しょう。反抗心と知性の思い上がり を抑えるまたとない手立てです。死 を愛し、そして主に信頼して申し上 げるのです。御身のお望みのよう に、御身がお望みの時、御身がお望 みの場所で」[10]。

死の辛さは歴然としています。それ が両親や子どもたち、夫婦や兄弟な どもっとも愛する人たちの場合には なおさらのことです。しかし、神の 恩恵で、「主は、御父から託された 人を誰一人お見捨てになりません。 使徒パウロのことばに示されている ように(コリント15.55参照)、わた したちは、主の復活の光りのもと に、死から「とげ」を抜くことがで きます。わたしたちは、死が命を汚 し、わたしたちの愛をむなしくし、 わたしたちを深い闇の深遠へと押し やるのを阻むことができるのです | [11]。私たちが主の傍らで至福直観

の喜びに浸るのを、主がお望みであること以上に確かなことはありません。日々この希望を増していますか。創立者のように信心を込めて、vultum tuum, Dómine, requíram[12] 主よ、私は御顔を尋ね求めます、と祈っているでしょうか。

悲しみを伴うこの時は、深い信仰に 根差したキリスト信者の家庭なら、 一度々見られることですが一 家族の 絆を強める機会になります。「こう した信仰のうちにわたしたちは、主 は死に完全に打ち勝つことを認識 し、互いを慰め合うことができま す。わたしたちの愛する人は、無の 闇の中に失われたのではなく、神の 優しく力強い手の中にいるのだと、 希望をもって確信することができま す。愛は死よりも強いのです。です から、愛を育てる道を歩みましょ う。愛を強めましょう。そうすれば あらゆる涙がぬぐわれる日まで、 『もはや死はなく、もはや悲しみも

嘆きも苦労もない』(ヨハネの黙示録 21,4)日まで、愛がわたしたちを守っ てくれます」[13]。

このキリスト教の考え方は、人がこ の世の儚さを思い知った時に襲われ がちな恐れに対抗する本物の手段に なります。同時に、前述したよう に、愛する人の死を悲しみ、別離に 涙するのは極めて当然のことです。 イエス・キリストも、親しい友だち のラザロを蘇らされる前に、涙を流 されたのです。しかし、大げさにし ないようにしましょう。キリスト信 者にとって「死は婚宴に与る」こと だからです。聖ホセマリアはこのこ とを解説し、話していました。 | 主 が、ecce spónsus venit, exít óbviam ei (マタイ25,6)―花婿だ。迎 えにでなさい― と仰せになるときの ため、聖母に取り成しを願いましょ う。聖マリア、神の御母、私たち罪 人のために執り成してください、今 も…。死の時に分かるでしょう。微

笑んで最期を迎えるでしょう。恐れで顔をゆがめることはありません。マリアが両手を広げて待っていらっしゃるのですから」[14]。

これまでの思いは全ていつも、命の与え主である神の全能についての考えと結びついていなければなりません。vita mutátur, non tóllitur[16] 死は滅びではなく、新たな命への門で

す。神の傍らにいることを確信することは、死ぬときに与えられる母で、死ぬときに与えられます。る教会のあらいしてくれます。よいな復活することを信じます。よい遠に御身と共に生きるため、執りを関いの無限の功徳と御母の私に対するまた。よい愛によって、私の体が再びして御身の私に対するまた。よい愛によって、私の体が再びと合わされることを信じます。」
[17]。

娘たち息子たちよ、この信仰の恵とであるよう努めましたがあるよう努めましたがある人を変わる人を変わるとなる。毎日、成の豊かな恩恵に与ることがでいまります。終りまりまりますが、全世界の家庭が、結婚との教いよりを心に刻み込まれた神のないましたのをでいる。という。

諸聖人の祭日に引き続いて、全ての 死者を記念する聖なる教会の知恵に ついてじっくり考えてもらいたいと 思います。今月、そして一年中、典 礼に心から親しみ天上の喜びを味 わってください。

皆さんのパドレ

ハビエル

ローマ、2015年11月1日

追伸:数日後、手術を受けるためナバラ大学病院に入院します。皆と固く一致しています。お祈りの力で私を支えてくれるよう望んでいます。

[1] 1コリント15,31。

[2] 聖ホセマリア、『道』738番。

- [3] 教皇フランシスコ、2015年6月17 日一般謁見の講話。
- [4] 知恵の書1,13。
- $[5] \Box 75,12$
- [6] 聖ホセマリア、『拓』879番。
- [7] 『カトリック教会のカテキズム』1010番。
- [8] 聖ホセマリア、『道』739番。
- [9] 聖ホセマリア、1948年12月13日 説教の注。
- [10] 同上。
- [11] 教皇フランシスコ、2015年6月 17日一般謁見の講話。
- [12] 詩篇26[27],8参照。
- [13] 教皇フランシスコ、2015年6月 17日一般謁見の講話。

[14] 聖ホセマリア、1974年6月23日 家族の集まりのメモ。

[15] 聖ホセマリア、『鍛』769番。

[16] ローマミサ典書、死者の序唱I。

[17] 聖ホセマリア、1948年12月13 日説教のメモ。

写真 GideoTsang (cc)

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/zokujinkuchouno-tegami-2015-11/(2025/12/12)